

## 審査の結果の要旨

氏名 一柳 貴博

インクルーシブ教育の推進に向けて、小学校の通常学級に在籍する発達障害傾向児とその周囲の児童（以下、周囲児）との関係形成に向けた支援は重要である。本論文は、「周囲児」と発達障害傾向児の関係に注目し、関係の実態を調査した上で、新たな関係支援モデルを提案することを目的とした。論文は、本論文の問題意識の提示と先行研究の概観を行う第1部、発達障害傾向児に対する周囲児の関わりを検討する第2部、「周囲児」に着目した発達障害傾向児の関係支援を検討する第3部、研究成果を総合的に考察する第4部から構成される。

第1部第1章では、「周囲児」に着目した発達障害児の関係支援の重要性を論じた。第2章では、小学校における「周囲児」に焦点をあてた先行研究の概観から、周囲児に焦点をあてた基礎的知見の不足と、周囲児に着目した活用可能性の高い関係支援の必要性を指摘した。第3章では、第1章と第2章を踏まえ、本論文の目的および構成を示した。

第2部では「周囲児」に関する3つの基礎研究を行った。第4章（研究1）では、発達障害傾向児に対する態度について、学生358名を調査協力者とする質問紙調査を実施し、小学校時代の発達障害傾向児との主体的かつ一定の閾値以上の関わりが生じることで「関わりへの志向性」が相互作用的に高まる可能性が示された。第5章（研究2）では、小学校時代における発達障害傾向児に対する認識プロセスについて、学生20名を調査協力者とするインタビュー調査を実施し、直接的な関わりの中で、周囲児が発達障害傾向児の人柄や発達の特性に対する理解を得ることで、肯定的・友好的な認識の変容につながることを示唆された。第6章（研究3）では、小学校教諭95名を調査協力者とする質問紙調査から、小学校の通常の学級に在籍するASD特性児（自閉スペクトラム症が疑われる児童）に対する「周囲児」の要支援行動および代替行動のメカニズムを明らかにし、周囲児の代替行動を増やす4つの支援を提案した。

第3部では「周囲児」に着目した関係支援の検討として3つの研究を行った。第7章（研究4）では、小学校教諭95名を調査協力者とする質問紙調査から、小学校教諭の対応の多くが周囲児の要支援行動そのものに限定された対応であることを明らかにした。そこで、従来の対応に加えて応用行動分析の枠組みを参考にした支援を行うことの有用性が示唆された。第8章（研究5）では、学校教諭やスクールカウンセラー等の学校教職員が応用行動分析の知見を活用し、周囲児の行動に対する支援を検討できるICT支援アプリ「教員ナビ」を開発した。第9章（研究6）では、「教員ナビ」および「教員ナビを活用した支援方法」について学校教職員43名からフィードバックを得るワークショップを実施し、学校現場での活用可能性の高い発達障害傾向児の関係支援モデルを提案し、その実践可能性を検討した。

第4部第10章および第11章では、総合考察として、「周囲児」に着目した発達障害傾向児の関係支援の必要性とその実践可能性を論じ、本論文の学術的・臨床的意義を示した。本論文は、インクルーシブ教育の推進に向けて、「周囲児」に焦点をあてた基礎的知見を見出し、「周囲児」に着目した発達障害傾向児の関係支援の実践方法を提案した点で特に意義が認められる。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。